

2014 年度 大学英語教育学会 (JACET) 関西支部秋季大会
JACET Kansai Chapter 2014 Fall Conference

発表要旨集 / Summaries

企画ワークショップ / Invited Workshop 10:15-11:45 【北費 204】 →203 に変更します

Praat による音声分析入門：音声を「見て」みよう (in Japanese)

Introduction to Praat: Let's Take a Look at Sounds

講師： 山本 勝巳 YAMAMOTO, Katsumi (流通科学大学 University of Marketing and Distribution Sciences)

略歴： 神戸市外国語大学大学院修了 (英語学専攻)。専門は音声学。Twitter ID: yamcat2015

音声発話は目に見えないので、それを研究対象とする場合、目に見えない音声を何らかの方法で目に見えるようにする (=可視化する) 必要がある。近年の技術発展により、音声の可視化作業自体は、個人が所有するラップトップPCでも可能になっている。無料で利用できる音声分析プログラムも複数提供されている。そこで本ワークショップでは、音声分析を行ったことがない方々を対象として、無料で利用できる音声分析ソフトPraatを用いた音声分析について実践を含めて解説する。音声分析から音声の加工を中心に、(時間の余裕があれば) 聞き取り実験における音声提示まで、その手順を具体的に紹介したいと考えている。Praatの使い方だけでなく、音声分析を行う場合の実際的な注意点についても情報を共有したい。

なお、

1. WindowsあるいはMacのラップトップPCを持参して下さい。
2. Praatというソフトウェアを使います。以下のページのDownload Praat: から1. Downloading the Macintosh/Windows editionの説明に従って、Macintosh, Windowsのうち利用したい方をダウンロードし、インストールを済ませておいてください。 Praat: doing Phonetics by Computer
<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>
3. WSで使うサンプル音声をWS1週間前をめぐりに <http://lab2015.net/blog/> に掲載します。参加前に確認をお願いします。

(1)

母語でのスピーチ不安が英語学習に及ぼす影響について

Speech Anxiety and L2 Learning Anxiety in Japanese University Students

中村 弘子 NAKAMURA, Hiroko (鳥取環境大学 Tottori University of Environmental Studies)

日本人は他のアジア人より母語でのコミュニケーション不安が高いと報告されているが、大学の英語教育ではプレゼンテーションやディベート等、学生に口頭発表をさせるクラスが増加している。本研究では母語でのスピーチ不安が高い学生は英語学習不安も高いという仮説を立て、2014年度新入生対象にコミュニケーション不安に関する自己報告 (PRCA) と外国語教室不安尺度 (FLCAS) の2つの質問紙調査を実施し、各不安値とプレイスメント・テスト (VELC テスト) の成績との相関を調べた。その結果、コミュニケーション不安の下位項目であるスピーチ不安と外国語学習不安値との間に正の相関がみられた ($n=105$, $r=0.65$, $p < .01$)。また外国語学習不安と VELC テストのリスニングスコアの間にも低い正の相関が認められた ($n=105$, $r=0.36$, $p < .01$)。以上の結果から口頭発表を行い、スピーキングやリスニングのスキルの伸長を図る授業では、学生の情意面にも配慮する取り組みが必要であると考えられる。

(2)

Writing Creatively about Language Teaching

言語教育についての創造的ライティング

ジェームズ・クロッカー James Crocker (神戸女子大学 Kobe Women's University)

There has been a change in how creative writing is being regarded, utilized and appreciated in academic circles. The Arts-Based Research movement encourages us to re-evaluate the traditional boundaries between academic and creative writing - to write about topics of professional interest using our artistic talents. This poster presentation focuses on the use of creative writing in language teaching research.

There are now increased publication options for TESOL researchers. New publications are challenging the old distinctions and providing venues for writing as Arts-Based Research. These can be both alternatives and supplements to traditional, statistics focussed academic journals.

As Cook, Brown, and Adamson (2014) put it in a recent article, "...throughout academic publishing there is a growing respect for alternative voices and alternative means of expression including ... prose... This is giving more and more freedom to scholars to publish their work in their own voice."

We have always known that creative writing can allow us to examine the deepest and most profound aspects of our professional lives; that it can reach us in ways that academic writing doesn't, describe phenomena and ask questions that academic writing does not deal with, and leave a more lasting impression.

This poster presentation has some examples from *The Font - A Literary Journal for Language Teachers*, and explains how you can contribute as a writer.

研究発表・実践報告 / Research Papers | Practical Reports 13:00-15:15

Session 1 【南費 202】

司会： 高橋 幸 TAKAHASHI, Sachi (京都大学 Kyoto University)

< 賛助会員発表 Publisher's Presentation > 13:00-13:30 (in Japanese)

映画 Erin Brockovich を題材とする大学英語教科書—*English on Screen: Learning Real English through Erin Brockovich* (金星堂 2015)

English on Screen: Learning Real English through Erin Brockovich (Kinseido 2015)

井村 誠 IMURA, Makoto (大阪工業大学 Osaka Institute of Technology)

松田 早恵 MATSUDA, Sae (摂南大学 Setsunan University)

山本 五郎 YAMAMOTO, Goro (広島大学 Hiroshima University)

中井 英民 NAKAI, Hidetami (天理大学 Tenri University)

映画 Erin Brockovich (2000) は、1993 年にアメリカ合衆国で実際に起きた公害訴訟事件をもとに映画化された物語である。本発表では、この社会ドラマを題材とした大学総合英語教科書について紹介する。映画は、オーセンティックな音声のみならず、映像や文脈情報を備えた理想的な外国語学習のリソースであり、また題材内容自体に教育的価値があるものも多い。本書では、映画に見られる実際的な状況場面に応じた言語活動を通して、学習者が意欲と関心をもって英語を学習していけるように工夫している。本書の大きな特徴は、ひとまとまりのストーリーを、Reading ユニットと視聴覚学習ユニットの 2 回の授業で学んでいく構成になっていることである。つまり、学習者は 1 週目の授業で読んで理解した内容を、翌週の授業では映像と音声で確認しながら、英語に意識を集中させて学んでいくことができる。さらに裁判や公害問題などの分野における用語や、英語表現なども取り上げて解説している。

< 研究発表 1 Research Paper 1 > 13:35-14:05 (in Japanese)

教科書本文の音読活動がもたらす効果

What Kind of Effect does Reading English Textbooks Aloud Have on Learners?

井上 聡 INOUE, Satoshi (環太平洋大学 International Pacific University)

音読活動には長期記憶の知識を自動化させる効果があるため (鈴木・門田, 2012)、英語運用能力を高めるうえで有用な指導のひとつであるとされる。そういった点で、教科書本文は有用なコンテンツとなりうるが、筆者の調査では、高校において教科書の音読指導に割かれる時間は少なく、大半の時間が、コミュニケーション活動や訳読に充てられている。しかしながら、英語に強い苦手意識を持つ大学生を対象に、教科書本文を用いて様々な音読指導を行ったところ、外発的動機づけが緩和される一方で、自己効力感、内発、理想自己 (将来の仕事と英語を結び付けて考える傾向) といった動機づけ項目が活性化された。統計解析の結果、上記の傾向と特定の音読指導法の間に関連関係が認められた。英語学習への意欲を高め、コミュニケーション活動を円滑に行う素地を固めるうえで、言語活動における音読指導の意味合いを再考すべきであろう。

< 研究発表 2 Research Paper 2 > 14:10-14:40 (in Japanese)

多読評価に関する一考察 —EPER テスト分析を通して—

Examining Extensive Reading Evaluation: An Analysis of the EPER Test

吉田 弘子 YOSHIDA, Hiroko (大阪経済大学 Osaka University of Economic)

高瀬 敦子 TAKASE, Atsuko (関西大学非常勤 Part-time Instructor, Kansai University)

大学生の多読評価によく用いられているものに、エジンバラ大学の多読研究プロジェクトが開発した Edinburgh Project on Extensive Reading Placement/Progress テスト (EPER PPT) がある。本研究は記述式のクローズテストである EPER PPT のテスト項目を、ラッシュ分析を用いて選定することを目的とする。4 年制大学に在籍する非英語専攻の 1 年生 97 名が英語授業内で EPER PPT を受験した。受験者の英語力は CEFR の初級レベル A1 および A2 であった。まず、最初の分析で、141 項目のうち 41 項目が不適合項目と判明した。これらの項目を削除

したのち、不適合項目がなくなるまでラッシュ分析を繰り返した。最終的に 60 項目が削除され、81 項目が残った。81 項目の EPER PPT の信頼性は、Person Reliability が 0.89、Item Reliability が 0.96 となった。本研究の結果、多読指導の評価に用いられている EPER PPT は、テストの項目数を約 40%削減しても高い信頼性が得られることが示唆された。なお、発表では多読の評価のあり方についても考察する。

<研究発表 3 Research Paper 3> 14:45-15:15 (in Japanese)

C-test と TOEIC のリスニング及びリーディング得点との相関性に関する一考察

An Examination of the Correlation Between Scores of C-test and Those of TOEIC Listening and Reading Sections

森永 弘司 MORINAGA, Koji (同志社大学非常勤, Part-time Instructor, Doshisha University)

竹村 理世 TAKEMURA, Riyo (同志社大学非常勤 Part-time Instructor, Doshisha University)

cloze test の一種である C-test は、TOEIC や TOEFL のような標準テストと同様、英語の総合能力を測定する意図で開発されたテストである。試験実施時間が短く(標準的な実践時間は 10 分程度)、作成が容易であるにもかかわらず、近年わが国ではほとんど研究されることがなくなってしまった。今回の研究では 64 名の参加者を対象に、C-test の得点と TOEIC のリスニング部門の得点とリーディング部門の得点、及び二つの部門の合計点との相関性を調査した。その結果 C-test の得点と TOEIC のリスニング部門の得点との相関係数が $r = .46$ 、リーディング部門との相関係数が $r = .56$ 、リスニングとリーディングの合計点との相関係数が $r = .63$ であることが判明した。C-test は、担当クラスの学生の総合的な英語力を大まかに把握したり、習熟度別のクラス分けに使用したりできるレベルにあるテストであるといえる。

Session 2 【南麓 203】

司会: 笹井 悦子 SASAI, Etsuko (桃山学院大学 St. Andrew's University)

<研究発表 4 Research Paper 4> 13:00-13:30 (in Japanese)

英語教員の授業力育成に向けた教材開発—アンケートにみる意識と現状—

Designing Materials for Developing English Teaching Skills: Analysis of A Questionnaire Survey

村上 裕美 MURAKAMI, Hiromi (関西外国語大学短期大学部 Kansai Gaidai College)

金井 啓子 KANAI, Keiko (近畿大学 Kinki University)

基盤研究「大学英語教員の授業改善を促し授業力育成を可能にするポートフォリオと教材開発の研究」では、統一した英文ソースを用いてメンバー 5 人が各専門分野等を生かして作成した教材を登録者に提供している。その研究活動の必要性と意義を教員へのアンケートによって調査することが、今般発表する研究の目的である。大学英語教員が教材作りに苦慮しているであろうこと、教員同士の教材提供活動が教材作りに悩む教員への支援となるであろうことを、調査前の推論として掲げていた。調査の結果、教員の多くが教材作成の負担や適切な英文ソースを用意することに困難を感じていることが判明した。さらに、自分以外の教員が作成した教材を使用することへの抵抗感の強さや、研究グループが教材を提供しているウェブサイトの認知度の低さも浮き彫りになった。そのため、教員同士が実際に顔を合わせて教材について話し合う場を設ける必要性が導き出された。

司会: 松田 早恵 MATSUDA, Sae (摂南大学 Setsunan University)

<研究発表 5 Research Paper 5> 13:35-14:05 (in Japanese)

チャンクの組み合わせ音読が描写タスクの発話に与える影響

Effects of Chunk Combination Practice on Picture Description Task Performances

山岡 浩一 YAMAOKA, Koichi (関西大学大学院生, Graduate Student, Kansai University)

発話の流暢さと正確さは限られた認知資源を取り合い、トレードオフすると言われている。しかし、チャンクの使用で両者が共に向上する可能性がある。すなわち、チャンクの処理は認知負荷が軽いと言われ、流暢さを向上させる効果が確認されている。このとき、認知負荷を上げずにチャンクを正しく組み合わせれば、正確さが上がると期待される。そこで、暗示的知識を促進してチャンクを組み合わせることで、流暢さを損ねずに正確さが向上するかを確認することにした。チャンクの組み合わせパターンを目立たせた英文リストを音読する群を処置群とし、無作為な順番の英文リストを音読する群を対照群とした。発話速度等で流暢さを測定し、冠詞、動詞、前置詞に注目して正確さを測定した。音読の前後に絵を英語で描写するタスクを実施した結果、組み合わせパターンの音読後の方が流暢さと正確さ（動詞）が向上し、チャンクが流暢さと正確さを上げる効果が示された。

<実践報告 1 Practical Report 1> 14:10-14:40 (in Japanese)

三島由紀夫の短編を英語で読む—“Swaddling Clothes”を活用した精読授業—

A Reading Class Using Yukio Mishima's Short Story, "Swaddling Clothes"

藤岡 千伊奈 FUJIOKA Cheena (流通科学大学 University of Marketing and Distribution Sciences)

本発表は、国内外で高い評価を受けている数少ない日本人作家の一人と考えられる、三島由紀夫の短編小説の英訳版と三島自身のインタビュー記事を活用したリーディング授業の実践報告である。2009年度及び2013年度に私立大学の非英語専攻の2年生を対象に後期の約5コマで実施した。通年で様々な文学教材を用いた精読授業で、学習者の総合的なリーディング力・内容理解・批判的思考力の向上を目指した。発表では、日本文学の英訳版を使うメリットに加え、三島作品を選択した理由、授業の進め方、物語の中の“symbolism”を見つける等のタスク及び学生の作品例を紹介する。2013年度末に実施した学生アンケートの結果によると、多くの学生が文学教材で英語を学ぶことを好意的に捉えていることが明らかになった。また、学生の反応及び観察から、学生が物語の内容を理解し批判的思考力が刺激されたことが示唆された。

<実践報告 2 Practical Report 2> 14:45-15:15 (in Japanese)

リスニング能力開発も狙ったリーディング授業の取り組み

An Experimental EFL Reading Class Focusing on the Development of Listening Comprehension Skill

植松 茂男 UEMATSU, Shigeo (京都産業大学 Kyoto Sangyo University)

筆者は非常勤で教えている大学でリーディングの授業を担当しているが、英語力に関しては最上級レベル学習者と考えられるため、初年度(2013年度)に、ニーズアナリシスを行った。その結果、リーディングよりリスニング能力を向上させたい、という希望が予想外に多かった。

授業はテキストを読むのではなく、付属のCDを利用し、教室内課題としてテキストを見ずに聞き、(1)概要を把握し、内容理解質問に答え、(2)テキストを開きながら聞き取れなかった部分を精査し、(3)シャドーイングの練習を2回行う。また、教室外課題として、(1)既習の語彙・表現テストの準備(日英15問)、(2)聞き取りテストの準備(穴埋め30カ所)をする。

2014年度本クラス前期終了時(n=23)、入学時のTOEFLORテストのリスニングスコアが同等のクラス(n=24)とリスニングテストで比較したところ、統計的有意なスコア差が見られた(t(45) = 2.24, p = .03, d = .67)。

また、2013年度、2014年度ともに学期終了時にアンケートを実施し、フィードバックを求めたところ、「ためになった」という回答が圧倒的に多かった。教授言語は日本語と英語のどちらがよいかについて尋ねたところ、「英語」が多数を占めた。

Session 3 【南費 204】

司会: 玉井 史絵 TAMAI, Fumie (同志社大学 Doshisha University)

<実践報告 3 Practical Report 3> 13:00-13:30 (in Japanese)

大規模英語再履修クラスにおける学生の苦手意識変化を目的とした授業実践

Classroom Practice on Changing Students' Negative Attitude Towards English in a Large English "Repeat Class"

大賀 まゆみ OGA, Mayumi (同志社大学非常勤講師 Part-time Instructor, Doshisha University)

登録学生数 120 名、4 回生が半数を占める大規模な一般教養の英語再履修クラスにおいて、英語に苦手意識を持つ学生の「出席率の改善」、「英語に対する否定的な意識の軽減」、「基本的な英語力の向上」を目的として授業実践を行った。初回及び最終回の授業時に、アンケート調査を実施・分析した結果、テキスト、Power Point を活用した文法説明、コンテンツに焦点をあてた授業、教員・学生間のコミュニケーションを促進するコメントシートの 4 点が好評であった。当該授業の学生の満足度は 90%、平均出席率は約 70%、過半数の学生が英語力がついたと答え、4 割の学生は英語に対して肯定的、またはより肯定的な感情を持つようになったと回答した。一方、ペアワーク、グループワークについては学生間で意見が分かれ、大人数クラスの中でいかに学生中心活動と協働学習活動を取り入れていくかは今後の課題となった。

<実践報告 4 Practical Report 4> 13:35-14:05 (in Japanese)

ニュース教材による文法力向上と、ライティングスキルへの効果

Increase in Grammatical Knowledge Using English News and the Effects on Writing Skill

葛田 和美 TSUTADA, Kazumi (京都産業大学 Kyoto Sangyo University)

日本人英語学習者がグローバル人材としての English user となるために必須であるのが文法習得であるという前提に立ち、独自の文法習得法を提案、実践した。教材としてフォーカス・オン・フォームの視点から英語ニュースを活用したところ、文脈化された教材から文法を学ぶことで、学生は文法を学ぶ意義を認識し、動機づけ向上にも大いに効果が見られ、また本教授法の実施前後のプレ、ポストテストでは文法力に有意差が認められた。加えて文法力向上が産出能力(ライティング)にあたえる影響を、complexity, accuracy, fluency を factor として分析したところ各々に有意差が認められた。これらを踏まえ、email writing の重要性が高まる現代社会において、ライティング技能の向上につながる文法習得の重要性を再認識し、これを踏まえた効果的な教授法を再考する機会としたい。

<実践報告 5 Practical Report 5> 14:10-14:40 (in Japanese)

小学生対象「英語絵本の読み聞かせ」ーモジュールモデルの実践事例

A Report on Shared-reading for Elementary School Children as a Module Case

木戸 美幸 KIDO, Miyuki (京都光華女子大学 Kyoto Koka Women's University)

発表者の勤務する大学の併設小・中・高校は、文部科学省の平成 26 年度英語教育強化地域拠点校に採択された。小学校英語教育の早期化・教科化を視野に「研究開発型」モデルとして、平成 26 年 9 月より、小学生対象にモジュール形式で英語絵本の読み聞かせを実施する授業を展開している。今回の実践報告では、1) 児童の英語に対する興味・関心を高め、異文化理解と語彙力・統語力向上につながるよう、月ごとに全 6 学年で共通したテーマを設定し、どのような絵本を選定したか、2) これまで英語を教えたことがなく、中学校外国語科の免許も持たない担任教員(全学年)が、各回 10 分間の読み聞かせを月 4 回実施し、1 冊の絵本を読了するために、どのようなカリキュラムと指導方法を用意したか、について報告した後、実際の授業風景を一部示しながら、今後の展望についても言及する。

<実践報告 6 Practical Report 6> 14:45-15:15 (in Japanese)

英語と異文化教育の実践報告－81歳、Nさんのレッスン

Life History and English Lessons: A Case Study of Mr. N at 81

講師： 前田 庸衣 MAEDA, Nobue (レッツスタディ イングリッシュ&カルチャー Let's Study English & Culture)

私は英語教育を30年、異文化教育を20年以上している。英語と異文化教育の教室を開いて10年すぎた。教室は子どもからシニアまで(3歳から85歳)生徒が在籍。ほとんどが個人レッスン。ゆったりとした雰囲気の教室で体験レッスンで英語歴と授業をうける目的を伺い、学ぶスタイルをみつけてゆく毎日である。

今回は戦争で英語をまったく習ったことのない生徒、Nさんが81歳で九州から神戸に引っ越し、北野を訪れ、道の名前や看板が英語だったのに驚いた。神戸に住むには英語が必要だと思った。英語のアルファベットから始め、聞き取りと発音、読み書き、辞書がひけるようになるために入会。子どもの頃に満州に住み中国語が話せる。言葉は耳から入るので、英語の母音から学びたいと希望。Nさんの語学の経験やライフヒストリーを紹介しながら、英語の母音と子音の聞き取り、きれいな発音ができるようになったプロセスを紹介する。

Session 4 【北麓 106】

司会： 森下 美和 MORISHITA, Miwa (神戸学院大学 Kobe Gakuin University)

<実践報告 7 Practical Report 7> 13:00-13:30 (in English)

Frontloading and Reinforcing Vocabulary

語彙の紹介と習得

マーランド ジョン MARLAND, John (関西外国語大学 Kansai Gaidai University)

Throughout the semester, teachers introduce new vocabulary. Though students may remember the vocabulary well enough to complete the current unit, without ongoing reinforcement, they are likely to forget the new words by the end of the semester. How can teachers break this pattern of learn-and-forget? One option is “frontloading and reinforcing,” i.e. giving students a large amount of vocabulary at the beginning of the semester, and then teaching them strategies for learning and reviewing those words throughout the semester. In our research, we found that if students made flashcards at the beginning of the semester; were taught how to use them effectively; and were given time to use them in class, they were able learn and retain the vocabulary throughout the semester. The students performed well on midterms that included vocabulary not yet encountered beyond the cards as well as on final exams that covered vocabulary covered in units done in the early part of the semester. This presentation will describe the methods used, the students' reactions to those methods, and the results of tests given at the beginning, middle and end of the semester. This action research was conducted by John and Holly Marland, both of whom are assistant professors at Kansai Gaidai University in Hirakata, Japan.

<実践報告 8 Practical Report 8> 13:35-14:05 (in English)

Digital Darwinism: The CALL to Evolve

Eダーウィニズム：メディア利用により進化する英語教育

スミザーズ ライアン SMITHERS, Ryan (佛教大学非常勤講師 Part-time Instructor, Bukkyo University)

Owing to the dramatic rise of technology and the manner in which it has transformed the way teachers teach and students learn, computer assisted language learning (CALL) has become an exciting field of study and practice. Unfortunately though, technology has become a double-edged sword. On one hand, it can be a tool for educators to use to help

motivate students (Blumenfeld et al., 1991), while on the other hand, this same motivational tool can be a source of demotivation for educators (Hubbard, 2009)—due to the fact that CALL knowledge and skills must be constantly upgraded to keep pace with the evolution of technology.

With these sentiments in mind, this presentation will demonstrate why it is important for teachers to implement technology into their pedagogies, and how technology can be used to support language learning in the most effective and efficient manner, so that technology can be a source of motivation for students and teachers alike. One of the underlying themes of this presentation is that technology is evolving really quickly and teachers and teaching strategies need to keep up, so that technological advances can be utilized to help learners develop skills and strategies that will promote more efficient and autonomous language learning.

<実践報告 9 Research Paper 9> 14:45-15:15 (in English)

Fostering Learner Autonomy in University Settings Through Project-Based Teaching

大学英語教育におけるプロジェクト教育を通じた学習者オートノミー

クセン オアナ CUSEN, Oana (関西学院大学 Kwansei Gakuin University)

In recent years, learner autonomy has been recognized as one goal of English language education. With its focus on content, authentic language and experiences, group work, and increased learner responsibility, project-based teaching is an approach that can help learners achieve this goal. This presentation will introduce a classroom project, the “Students as Teachers” project, which was created and implemented in a private university setting, as part of an intensive four-skill English course. The course was offered to second year students and it met three times a week. For this particular project, groups of students chose units from a four-skill content-based textbook. Each group prepared and taught a 90-minute lesson based on their unit, which involved textbook work, as well as additional activities. This presentation will first discuss the lesson preparation process, namely how the groups created the lesson plan and the additional activities for their lesson. Also, the students’ performance during their assigned teaching period, and the students’ impressions of the project will be analyzed, based on video of the students teaching their lesson and project reflections that the students provided at the end of the project. Throughout the “Students as Teachers” project, students made all the decisions related to their group work, and the teacher only provided the structure for the project and support as needed, which led to a clear increase in student autonomy.

Session 5 【北賢 204】

司会: 生馬 裕子 IKUMA, Yuko (大阪教育大学 Osaka Kyoiku University)

<研究発表 6 Research Paper 6> 13:00-13:30 (in English)

Silent-Reading VS Being Read To: A Brain-Imaging Study

黙読と読み聞かせの比較: ブレインイメージング研究

波多野 良香 HATANO, Mika (立命館大学院生, Graduate Student, Ritsumeikan University)

田浦 秀幸 TAURA, Hideyuki (立命館大学 Ritsumeikan University)

This study examines young Japanese EFL learners and the more effective method for their comprehension - silent-reading (single modality) or reading while a text is being read aloud to them (two modalities). A total of 24 students (an average of four high school students in each Grade from 7 through 12) participated in the study. They were individually shown into a lab where they worked on four reading comprehension tasks on the computer: (1) silently reading a Japanese passage, (2) silently reading an English passage, (3) reading a

Japanese passage while it was read aloud to them, and (4) reading an English passage while it was read aloud to them. Each of the four tasks was followed by a comprehension quiz. During the tasks, each participant had a brain-imaging fiber cap placed on the head to monitor any activation. The results are discussed in terms of accuracy, reaction time, and brain activation observed by fNIRS (functional near-infrared spectroscopy) in the supramarginal gyrus and angular gyrus areas in both brain hemispheres. Cross-sectional data analyses were undertaken to reveal possible EFL developmental stages in reading accuracy, fluency (reaction time), and brain activation. An attempt was also made to compare how different brain activation may have occurred when the Japanese participants used their L1 Japanese or L2 English. It is hoped that the findings will shed light on how effectively reading can be taught in EFL settings in Japan.

<研究発表 7 Research Paper 7> 13:35-14:05 (in English)

EFL 語彙処理における正確性と流暢性の測定 : CELP-Sem と CELP-Lex の実証的比較

Measuring Accuracy and Fluency in EFL Lexical Processing: An Empirical Comparison of CELP-Sem and CELP-Lex

金澤 佑 KANAZAWA, Yu (関西学院大学院生 Graduate Student, Kwansei Gakuin University)

It is theorized that there are two different types of lexical competence: "accuracy," the domain of explicit knowledge, and "fluency," the domain of implicit performance (Hase et al., 2013). Despite the conventional practice to focus on accuracy, it is proposed that EFL learners' lexical proficiency should be evaluated not only by accuracy but also by fluency (Harrington, 2013). To assess one's lexical fluency, Kadota et al. (2010) invented CELP-Sem test. CELP-Sem is a PC-based vocabulary test which employs semantic judgment task. Although CELP-Sem has been validated empirically (Kadota, 2010), there is a notion that a semantic task is less valid a measure than a lexical decision task (Harrington & Carey, 2009). In response thereto, CELP-Lex test was developed (Hase et al., 2013). CELP-Lex shares similar format with CELP-Sem with a significant difference that it utilizes lexical decision task. This empirical study, then, investigated whether the two tests yield the data which positively correlates with each other by having Japanese EFL learners take the both tests successively (RQ1). It also investigated whether the same correlational results were detected between the tests in relation to vocabulary size (Aizawa & Mochizuki, 2010) and English proficiency, which was estimated by TOEIC score (RQ2). The statistical analysis showed that the two tests correlates with each other in their every three outcomes (correct responses, reaction time and coefficient of variance) with a few incongruence. The detailed results and possible rationale are discussed.

(PROCLAIMER: Since the prototypical presentation, which was supposed to be presented at the 40th JASELE Conference 2014 at Tokushima University, was canceled due to the straight strike of Typhoon Halong, this is the first time for the contents described above to be presented at an academic conference.)

シンポジウム 1 / Symposium 1 14:15-15:15 【本館礼拝堂】 (in Japanese)

シンポジウム 「授業外施設・プログラムを用いた大学英語教育改革」

University English Education Reform: Extracurricular Programs and Facilities

○近畿大学 英語村 E³ [e-cube]

講師：北爪佐知子（近畿大学） Sachiko Kitazume (Kinki University)

現在、学校法人近畿大学理事、近畿大学文芸学部教授、英語村村長、中央図書館長、国際交流室長。大阪大学文学部英文科卒業、大阪大学文学研究科博士前期課程修了。主な著書は、How to Do Things with Humor（開文社出版）、主な編著書は『近畿大学英語村-村長の告白』（英宝社）。代表論文は、‘Middles in English’ (WORD Journal of the International Linguistic Association, Vol. 47, No. 2)、‘Do the Japanese have a sense of humor?’ (Society, Springer)、「笑いとユーモアの視覚的考察」(『笑いの科学』Vol. 2 ユーモア・サイエンス学会)、「タイソンジョークスの語用論的考察」(JELS 16、日本英語学会)。

概略：

近畿大学英語村 E³ [e-cube]が誕生したのは2006年11月である。それから8年、入村者は80万人を超え、今では近畿大学の人気スポットに成長し、メディアからの取材、教育機関、自治体などの視察も多く受けてきた。近畿大学の学生、教職員だけでなく一般公開も行っており、さらに、英語村に類似する施設も多く誕生してきたと言われている。

E³ [e-cube]とは、English、Education、Enjoymentの3つのEを表し、故世耕弘昭元理事長の「楽しく英語を学べる空間を作る」という提案を具現化したものである。英語村の特徴は、キャンパス内で大学が責任を持って英語教育と国際文化教育を行う点にあり、「キャンパス留学」「英語教育革命」と呼ばれている。英語村の成功は、従来の英語教育とは異なる斬新な英語学習方法を取り入れたことによるもので、英語学習者の心理学的な視点と、英語教育理論に基づき、建物、施設、教員採用、プログラム、スケジュール作成などを創造してきたことによると考えられる。

○神戸学院大学 図書館留学 Toshokan-Ryugaku

講師：安田有紀子（神戸学院大学） Yukiko Yasuda (Kobe Gakuin University)

ニューヨーク州立大学フレドニア校大学院にてTESOL課程修了。中・高一貫校にて勤務後、名城大学、名古屋学院大学で非常勤講師。2010年より神戸学院大学法学部、2014年より共通教育センター所属となる。

概略：

神戸学院大学では2011年4月より、「図書館留学」プロジェクトを開始した。近年、学生の

英語力の低下に伴い、就職活動で苦戦する学生も多い。また、英語圏にある本学の協定大学に交換留学生を派遣できていない問題も抱えている。そのような現状を顧み、図書館が主体となり、学生の英語力向上のために図書館を教育の場とし、学びの環境を整えるべく開始したのが「図書館留学」である。

2011年の開始時には7種類あったメニューは、図書館司書と教員らの協力により、2014年現在では10種類に増えている。図書館司書らが企画したメニューに対して、「図書館留学」をサポートする教員らが授業内外でそれらの活動を支えている。

本発表では、主に2011年の開始からこれまでの図書館留学事業の経緯、教職協働による各種メニューの運営方法、さらに今後の発展を期待する他言語の取り組みについて紹介する。

○甲南大学 O-Zone

講師：ジョーンズ・ブレント（甲南大学） Brent A. Jones (Konan University)

Brent A. Jones has been teaching English in Hawaii, Japan and other parts of Asia since 1986. After completing his undergraduate studies at the University of Hawaii, he earned two Master's degrees from Indiana University, one in Language Education and the other in Instructional Systems Technology. He is currently the Director of Language Programs at Konan University, Hirao School of Management, and is pursuing an Educational Doctorate degree at the University of Reading.

概略：

This talk is intended as an overview of the self-access language study center established for students at the Hirao School of Management (Konan University). Topics will include key considerations and the background research we conducted in preparation for this project, goals and objectives, operational procedures, ongoing challenges, and advice for schools planning such projects. We will highlight the benefits (and shortcomings) of a "for students, by students" approach to self-access language study spaces.

シンポジウム 2 / Symposium 2 15:30-17:00【本館礼拝堂】(in Japanese)

英語リスニング研究最前線

Research on Listening Today: Listening Comprehension, Training and Instruction

講師/コーディネーター 門田修平 (関西学院大学) Shuhei Kadota (Kwansei Gakuin University)

略歴

関西学院大学・大学院教授。神戸市外国語学部英米語学科を卒業。専門は心理言語学、応用言語学。第二言語としての英語が、どのようにして知覚・処理され、記憶・学習されるかそのメカニズムについて研究している。ことばの科学会(会長)、JACETリーディング研究会、LET基礎理論研究部会を中心に活動。趣味は、食べて、飲んで、唄うこと。それと旅行。カラオケの選曲は多種多様。主な著書:『英語リーディングの認知メカニズム』<共編著>、『第二言語理解の認知メカニズム』、『SLA研究入門』(くろしお出版)、『英語のメンタルレキシコン』<編著>(松柏社)、『シャドーイングと音読の科学』、『シャドーイング・音読と英語習得の科学』(コスモピア)、『英語語彙指導ハンドブック』、『英語リーディング指導ハンドブック』、『英語音読指導ハンドブック』、『英単語運用力判定ソフトを使った語彙指導』<以上共編著>(大修館書店)など。

講師 佐久間康之 (福島大学) Yasuyuki Sakuma (Fukushima University)

福島大学人間発達文化学類教授。筑波大学大学院教育研究科修了。筑波大学助手、福島大学専任講師、助教授、准教授を経て2009年より現職。東北英語教育学会会長。小学校英語教育学会学会誌編集委員長及び常任理事。全国英語教育学会理事。主にワーキングメモリ内の言語処理(注意・記憶)に興味を持っている。

講師 菅井康祐 (近畿大学) Yasuhiro Sugai (Kinki University)

近畿大学経済学部准教授。筑波大学教育研究科教科教育専攻修了。つくば国際大学・大阪電気通信大学・関西大学・立命館大学・追手門学院大学などの非常勤講師を経て、2007年より現所属。ことばの科学会・外国語教育メディア学会関西支部メソドロロジー研究部会などを中心に活動。研究の関心は、外国語としての英語音声の知覚、言語の知覚単位と記憶の関係など。

講師 濱本陽子 (関西大学非常勤講師) Yoko Hamamoto (Part-time Instructor, Kansai University)

関西大学、神戸市外国語大学、非常勤講師。テンプル大学大学院 (TEOSL) 修了。通訳学校、日本語教師養成学校等にも学ぶ。公立の中学校、高校の教員経験20年。その後、プール学院大学、京都外国語大学、関西大学、神戸市外国語大学で非常勤講師として勤務。また、企業研修にてTOEIC、TOEFL、IELTS指導、海外留学前特訓、高校での特設レッスンなど、様々な機関で要望に応じた指導を行う。リスニング研究会元代表として、リスニングストラテジーの研究に従事。現在の関心事は「反転授業」。学生がより主体的に取り組み、授業内での練習や習得を増やせるよう模索中。中学、高校、大学、一般にわたる指導経験を生かし、さらなる授業改善につなげていきたいと願っている。

○シンポジウム開催趣旨

英語の4技能の中でも、リスニングに関する研究は、比較的早くからリサーチが進んできた領域です。しかしながら、昨今のグローバル化を受けて、スピーキングなど発信型の学習・教育にシフトが移ってきたようにも思えます。今回のシンポジウムでは、音声コミュニケーションの原点ともいべき、リスニング (listening comprehension) に焦点をあて、英語リスニン

グの習得および学習指導について、それぞれのパネリストの先生方の研究領域における最近の成果をもとに議論したいと思います。

(1)佐久間康之（福島大学）：心理言語学からのアプローチ

(2)菅井康祐（近畿大学）：実験音声学からのアプローチ

(3)門田修平（関西学院大学）：シャドーイングの認知研究からのアプローチ

(4)濱本陽子（関西大学大学）：リスニングストラテジー研究からのアプローチ

○門田修平

これまで第二言語習得（second language acquisition）理論は、学習者のインプットおよびアウトプットの活動を通じて、英語を「知っている」から「できる」状態に変貌させる、言い換えると、accuracyのみならず fluency を獲得することの重要性を明らかにしています。その中で、①Krashen に代表されるインプット理論、②Swain 等のアウトプット理論がこれまで主要な枠組みとして提唱されてきました。しかしながら、インプットをアウトプットに結びつけるには、その中間に音声言語をターゲットにした、十分な反復プライミングによる豊富なプラクティス（practice）が必須になります。音読と並んで、このトレーニング効果が期待できるシャドーイングを取り上げ、英語リスニングに対する効果についてお話しします。

○菅井康祐

ことばの聞き取り・理解には音声を知覚し語・句・文と情報を積み上げていくボトムアップ処理、背景知識・状況などから文意を類推するトップダウン処理と大きく二つの処理が関わります。そのボトムアップの側面だけをとってみても様々な要素が複雑に絡み合っており、学習者がリスニングのどの側面で壁にぶつかっているのかを特定するのはとても困難です。そのため、いわゆるリスニングテストで同程度の習熟度だと判定される学習者でもリスニングの下位構成能力が同程度であるとは限りません。言い換えれば、同程度のリスニング力だと判定された学習者であっても、必要としている学習・訓練は異なる可能性が十分にあります。この発表ではリスニングテストでは切り分けることの出来ないリスニング力の下位構成要素のうち、最も基本的でありながらも見過ごされがちな音声の知覚に焦点を当て、自身の調査結果を交えながらお話しします。

○佐久間康之

音声言語を理解するとは、瞬時に消失していく情報を如何に効率よく処理するかといったワーキングメモリ（WM）の働きがポイントとなる。リスニングと一口に言っても、音声言語の刺激の単位（語、文、文章等）や親密度及び認知発達段階によって音声情報の理解は大きく異なる。本発表では、WM内の音韻ループと長期記憶との関係を中心に、小学生及び大学生を対象とした調査データをもとに話を進めていく。小学生に関しては、リスニングテスト（児童英検

Bronze)と言語的短期記憶容量を測定するデジットスパンテスト(DST)の順唱の日本語版と英語版、大学生に関しては、英語熟達度テスト(リスニング、リーディング、文法)とWM容量を測定すると言われているリスニングスパンテスト(LST)との関係を中心にリスニングを構成する要因の複雑さについて触れていく。

○濱本陽子

使える英語を効率よく楽しく指導し **self-learner** を育てることが私のテーマですが、今回はリスニング力アップを目指して実践していることの報告をします。指導は多面的なアプローチで構成し、以下にあげるものはその例です。

- (1) 音の認識のためには音変化のルールを指導し、適宜 **dictation** を行います。
- (2) 音から意味が分かるためには、語・フレーズ・短文単位での **quick response** をします。
- (3) **main idea** の聴きとりやポイントにフォーカスした聴き取りを行い、弱点の振り返りをします。
- (4) 音源とのパラレルリーディングでは、プロソディーを意識しできるだけ音声の完全な真似をめざすシャドウイング、内容把握を意識するシャドウイング、また、虫食いテキストを使つてのシャドウイングなどの練習を重ね、自然な速さで正しく音読できるようにします。
- (5) 各自に見合った使えるストラテジーの指導をします。